

最近のトーマス・マン研究から

吉 田 次 郎

一九五五年八月トーマス・マンが死去してから六年たった。

この問題多い作家がその制作と發言をやめたことは、學者にはその研究の、批評家にはその批評の對象が客觀的にはひと先ず完結したことを意味する。そこで生前からすでに、活潑な研究や批評を誘發していたこの作家にたいして、最近はますますこの方面の仕事とその發表が活氣をおびているように見受けられる。そしてそれは雑誌における論文の發表、固有の意味での研究書や図書解題の刊行だけにとどまらず、さらにマン自身の未刊の文献の出版、未発見の文献の獲得と蒐集、作品の原稿や草案や手記類の蒐集とその比較検討、そしてそのための文書保管所 (Archiv) の設立 (東ドイツとスイスにおいて) にまで及んでいる。

このような趨勢は今後ますます盛んになってゆくものと思われる。というのも、その藝術的な高さはいうまでもないとして、トーマス・マンの文學は、はつきりとブルジョア文學であ

りながら、東西両側の現代の問題意識を強くそらずにはおかぬという性格をもっているからである。それはちょうどブレヒトが社會主義の陣營にありながら、これも東と西の関心を呼びおこし、彼にたいする研究が死後いよいよ活潑になりつつあるという事情に似たところがある。

以下の報告は上に觸れた廣い意味での最近のトーマス・マン研究について、その一部をお傳えするものにすぎない。第一は新しく發表されたマンの文献、第二は研究書、第三は Thomas Mann-Archiv の仕事、そういう順序で述べるつもりである。

一

現代の作家については、カフカのように生前にあまり認められなかった作家をのぞけば、「ウァファウスト」や「ウァマイ

スター」のように、重要な作品の手稿が死後に発見されて、その作家の像が相当の程度に拡大され、あるいは深化されるといような事態はまず起るまい。そこでわれわれがマンにかんする資料として先ず望みたいのは、彼の書簡や日記や手記類の刊行ということになる。この期待に一部分こたえてくれたのが次の三つの書簡集である。(彼の日記は一九三三年以後のものが密封されて、チューリヒのトーマス・マン文庫に保管されている。その包みにマン自身が、これは文學的価値はないが、一九七五年までに公開してはならぬと書きつけている。)

- A. Briefe an Paul Amann 1915-1952. Veröffentlichungen der Stadtbibliothek Lübeck, Neue Reihe, Bd. 3, 1959.
B. Thomas Mann an Ernst Bertram, Briefe aus den Jahren 1910-1955. Herausgegeben von Inge Jens, 1960.
C. Thomas Mann-Karl Kerényi, Gespräch in Briefen. Herausgegeben von K. Kerényi, 1960.

このうちCだけはその一部が Altes und Neues, Kleine Prosa aus fünf Jahrzehnten, 1953 に Briefe an Karl Kerényi (1934-41) として収められているだけで、あとはすべて未発表の書簡である。

A に収められている手紙は同書の序文によると、その大部分はリュウベック市立図書館がある財団の補助をえて「時價」よりかなりの廉價でアーマン(二八八四—一九五七)から買いつつたものである。(こういう買入價格の高價なことが、いま方々の蒐

集家のもとにちらばっているマン文献の蒐集をたいそう困難にしているということだ。)そして題名の示すとおり、収載されているのはマンの手紙だけで、アーマンのほうは、ただマンからもらった最初の手紙にたいする返書の草稿が(口付、一九一五年二月か三月)付録として添えられているだけである。

そういう編集方針はBについてもだいたい同じで、注釈のところに再録されているベルトラム(二八八四—一九五七)の二つの書簡を除けば、これもマンの手紙だけの書簡集である。それはマンの亡命が彼自身にとっても思いがけぬことであつたため、重要な文書がすべてミュンヘンの自宅に残され、それらの殆んど全部が(アーマン、ベルトラムの手紙もこめて)行方不明になつたことがその理由である。ただし亡命以後のマンにあつた彼らの手紙がどうなつたかについてはAもBも觸れていない。ベルトラム宛のマンの手紙は、ひとつを除いて全部がマールバハのシラー博物館所蔵のものである。

Cは副題の示すとおり往復書簡集で、ケレニー(二八九七)自身がその所有するマンの手紙と、マンにあつた彼の手紙の草稿によつて編集したものである。

したがつてこの書簡集では通信の兩當事者のイメージがそれぞれ自分と相手の手紙によつて照明されて不公平がないが、AとBでは受取人の像は発信人からの照明を浴びるだけだから一方的になりはすまいかという懸念が避けられまい。そこでむろん編纂者はそのための配慮をしているわけだが、先ずAでは書簡集の重點はその重要さからも量からも一九一五—一八八年にあ

るので、その時期からのこつているアーマンの唯一の手紙を付録としておさめ、かつ序文で彼の生涯と文筆活動についてやや詳しい解説を試みている。

それによるとアーマンはブラハ生れのユダヤ系オーストリア人で、文化史、文藝評論にたずさわり、ことにフランス文學を好んで、その方面で多数の翻譯を出した。ナチス時代フランスからアメリカへ亡命、晩年はその二、三のカレッジで教職についた。マンとの手紙のやりとりは、アーマンが一九一四年十一月号の「ノイエ・ルントジャウ」にのつたマンの「戦中の感想」(Gedanken im Kriege)を読んで、それにたいする疑問や反論を書き送ったことからはじまった。

アーマンは公的にはさほど重要性はない人物と思われるから、その手紙の缺けていることをそれほど惜しいとは思感ないが、ベルトラムのばあいは、私自身は彼の仕事について殆んど知るところがないにせよ、彼の思想は二十年代からナチス時代にかけてのドイツの精神史にひとつの役割を演じていると思われるから、その意味でも彼の書簡の缺如は惜しまれる。そこで編纂者インゲ・イエンスは「もの言わぬ人を語らせるために」、ベルトラムと、その友人でゲオルグ・クライスにぞくするグレンクナー(Ernst Glöckner)との五千を越える往復書簡のなかから豊富に引用して、注釋を組みたてる有力な資料となし、それによってマンの手紙の内容で不明な點を側面から解明するとともに、さらにマンとベルトラムとの關係、兩人の「選出の行なわれた精神的な場所を描寫する」ことを試みている。

この努力は苦勞なものであったろうと察せられるし、データの點では多くの寄與がなされているが(ベルトラム「ニーチェ」出版のいきさつなど)、しかし例えばベルトラムの仕事によく通じているブーフナー氏(Hartmut Buchner)から、インゲはベルトラムの仕事と人物をまるで知らず、まして研究もしていないという非難が出るとなると(ドイツ文學二二七頁)、これは「初步的な文献学的前提」の缺如を衝かれたことになる。この批判の當否は私にはよくわからないが、かりに當つているとしても、この書簡集全體から印象づけられるベルトラム像は決して不利なものではないのである。例えばベルトラムの「第三帝國にたいする最初の頃の積極的な態度」が「ゲーテ、ヘルダー、および初期浪漫派の意味での、ドイツの祖國的世界市民的更新の可能性にたいする、政治的にはめくらであつたかも知れぬが、純粹で無私な希望から生れた態度」(前掲誌一三二頁)であつたといわれていることに、この希望の内容のことは私にはわからないながら、ベルトラムのそういう態度が政治的にはめくらであつても、純粹で無私なものであつたこと、總じてベルトラムはそういう人柄であつたろうことは、この書簡集を読んだ私にも十分に首肯できる點であることをここで述べておきたい。

ところで三つの書簡集にみられるマンのほうの態度はどうかといえ、それは「ヴェニスの死」で語り手が主人公のアシエンバハの手紙の文體について多少の自己イロニーで、「好意的で重々しい」と評しているのに似ているといえるかも知れない。

い。もつとも重々しいとは言いすぎであるが、好意的ではたしかにある。むろん時に微妙なイロニーをまじえながらである。

それは外國の神話學者であるケレニーや、「非政治的人間の考察」を書いているときのよき協力者であったベルトラムにたいしてのみならず、「非政治的人間の考察」に反撥してくるアーマンにたいしてもそうなのだ。それは功なりとげた年長者の後進にたいするかしこい禮儀なのかも知れないし、あるいはフェーシ (Robert Fieser) がその Thomas Mann, Elin Meister der Erzählkunst, 1965 でしきりに強調しているこの作家の生れつきの人柄なのかも知れない。が、彼の手紙から受けるそういう印象は、やはり彼の作品の味わいに通じるものがあるのである。彼の作品には、時には冷酷とさえなるイロニーまたは批評がひらめいているにしても。

しかしマンは後輩にたいして好意的であるだけではなく、また大いに彼らの知識や學識を利用もしている。彼らが寄贈してくる著書や論文から教えられたり刺戟されたりしている点は別としても、例えばアーマンの手紙の一部を「非政治的人間の考察」のなかで名前をあげずに一友人のものとして引用したり、同書の執筆中に思いだして引用したいニーチュの言葉の典拠をベルトラムに教えてもらったり、ケレニーの論文から得たヒントをすく「ヨーゼフとその兄弟」の制作のなかに組み入れたら、そういうことは無数に繰り返されていて、これら通信の受益者はむしろマンのほうではないかと思えるくらいだ。(片方はどんな利益をえたかは、少くともベルトラムとアーマンのばあい

は問うことができない。)

それではこれら書簡集がわれわれのトーマス・マン研究にとってどれほどの利益を與えてくれるかというと、それはやはり資料的な価値、または傍證としての価値以上には出ないように思われる。その點で興味があるのはAとBで、なぜかという通信の量と頻度のもつとも大きいのがAでは第一次大戦中、Bでは大戦直前から三三年までで、この時期はマンの精神史において右からは變節として非難され、左からは發展として歓迎される變貌の時期であるからだ。この變貌とみえるものが實は連續的な過程なのか、飛躍という契機をふくんだ過程なのか、私にはまだしっかり把握できないのであるが、この點についての考察に多少とも示唆を与えてくれるようなところをAとBから二、三拾ってみることにする。

一九一五年一月の手紙でマンは「私は批評の——エッセイ風の——仕事にとびこみました。一種の論文、いや殆んど自家用の手記のようなものです」と書いているが、その論文のことをアーマンがやねたのにたいする返事として、一六年二月の手紙では、「いやお話になりません。何もかも言ってしまう、四つ折判で二百頁ほど書きなぐりましたが——さて、こいつをどうしたらいいのかわからないのです。というのも、公けにはこれでは一切不可能だからです——つまり、客觀的にすでに、というのですが、主觀的にも、私にとつても、もはや不可能だからです」と書いている。

ここで論文とか手記とかいつているのが「非政治的人間の考

察」(以下「考察」と略記する)であることは言うまでもないが、時期的にみてこの手紙の言葉は疑いもなく執筆當初の感想である。ところでマンの發言にはイロニーを注意する必要があるが、しかし以上の言葉には假面よりも、むしろ深い苦悶からくる自嘲のような調子を感じられる。というのも、彼はこの書の前まで、自分が擁護し防衛している保守的国粹主義的反民主主義的な立場が實は勝つのぞみのないポストであることを何度もみずから認めているからだ。だからあの手紙の意味するところは別に目新しいものではないが、しかしこれはこの種の告白として時期的にもっとも早いものである。つまり「考察」を長々と書いているうちに、そのボレミークが退却戰であることをさとったのではなくて、最初からそういう認識をもっている、しかも書きはじめ、書きつづけたということの意味しているのである。しかも最初に書き上げたものが、主観的にもはや不可能だと言っているのである。そうだとすると、このことは矛盾の多いこの書をもうひとつ深く探ってみる手がかりを与えてくれるすまいか。そしてこの書とは世界観的に(藝術觀もふくめて)つながらぬように見える「ヴェニス之死」(一九二二年)とのつながりを回復する手がかりをも与えてくれるすまいか。(あとで觸れるつもりのデイルゼンなども、「ヴェニス之死」の觀念的内容と「考察」の政治的世界觀とが合致しないと言っている。)(後掲書二二五頁参照)

以上のことと関連しているのだが、マンが「考察」の執筆のために中断された「魔の山」のことに觸れているところが興味

をひく。それは一七年三月二五日のアーマン宛の手紙で、そこでマンはこう言っている、「しかし私にいつも珍らしいことに思えるのは、私が信じていなかったこの戦争の起る前に私が政治を、しかも戦争の政治問題を血と心のなかに持っていたということです。つまり中断されたあの小説は次のような教育的政治的な主題をもっていたのです、ひとりの青年がラテンの雄辯家の、「労働と進歩」の辯護士、カルドゥチの弟子と——そして自棄的で才氣渾発な反動主義者とのあいだに立たされていました、——ダヴォスで。ここに背徳な死への共感が彼をとらえて離さないというわけです。」

これは二四年に完成した「魔の山」の基本構造のもっとも簡略で、そして正確な略圖であるが、しかしこれも別に新らしいものではなく、「考察」の一章で、この手紙よりやや早い時期に執筆したとみられる「徳について」のなかで、「魔の山」のテーマの簡単な、しかし手紙のそれよりやや詳しい素描をやっている(一九五六年版、四一六頁)。このくだりを讀むと、「魔の山」にあらわれている作者の、死と生、死による誘惑と生への奉仕という主題にたいする態度と、「考察」に示されている世界觀政治觀がうまくつながらず、というよりむしろ反対であるから「考察」におけるこの言葉は作者の例のかくれ義、「考察」を書いているうちに形成されてきた自分の見解を戦前へ位置をずらすとうとするずいぶん藝當ではないかとさえ思えるのであった。しかしあの手紙のくだりによって、やはりそれが率直な發言であったことを知らされたわけである。

戦前にこの小説の構想はきまり、最初のほうを書きだしていたとしても、その後ふたたび初めから書き直したのではなからうか。しかしBによると、マンは中断されていたこの小説を殆んど終戦直後からまた書きつけ、その後ベルトラムに執筆の進行状況を知らせているのを追ってゆくと、戦前の草稿にはすでにゼテムブリニは登場していたと察せられる。そのうえ、ゼテムブリニを指している「ラテンの雄辯家の、労働と進歩の辯護士」とか、「考察」のほうでナフタを指している「ややかかわしい神秘家で、反動主義者で、反理性の辯護士」とかいうような用語からうかがえるマンのこの両者にたいする態度と距離とはそのまま、完成された「魔の山」における作者の両者にたいする態度と距離に通じているのである。つまり進歩的文化人 (Zivilisationslied) にたいしては軽い揶揄とあなどりと、そして多少の好意と。鋭利な理論家である反動主義者にたいしては、その不吉な吸引力にたいする恐怖と嫌悪と。

すると「非政治的人間の考察」という書のありようはどういうことになるか。むろんナフタは、この書でマンが擁護し防衛しているイデオロギーのそのままの體現ではないが、少なくともその傾向において通じるものがあり、逆にマンがこの書で憎しみと敗北感のコムプレックスで論駁しているのは *Unwissend, inconsistent* なのである。するとこの書は、マンみずから言っているように、ドイツとドイツ文学が「知的になること、政治的になること、民主的になること」の歴史的事實を容認しながら、「個人主義的自由の立場」から行った「いささかの抗議」

でしかなかったのか (A, 一六一年二月五日付の手紙参照)。それにしては戦中二年餘にわたって、六百頁をこえる論争と自己分析をつづかせた原動力はなんであったのか。

マンはこの書を「自分の個人的な土臺の修正」、「自分の土臺の全修正」と名づけている (Vgl. Brief an Amann vom 7. VI. 1915 u. Lebensbrief in: Inseljahrbuch 1954, S. 64.)。この修正とは、戦後のヒューマニズムの民主主義的な立場へ向っての修正なのか。一九三〇年に書いた *Lebensbriefe* ではその意味に受けとれる。しかし一九一五年における修正の意味もそうだったとすれば——その地点から眺めて、「非政治的人間の考察」という書はどう考えればよいのか。評家はこの書を一方的に歓迎したり非難したりするまえに、もう一度、いまひとつ深くこの書を読んでみる必要があるはいまいか。

次に「考察」からマンの轉向とか變節とかの非難を呼んだ「ドイツ共和國について」(一九三三年)へいたる時期の、革命や政治的な出来事にたいするマンの反應を示す箇所をBから拾ってみよう。

一八八一〇月三日の手紙、「一九一八年九月三〇日、ドイツ國が君主政治の憲法から議會政治の民主主義憲法へ移ったと紙面で讀んだとき、強いショックを受けました。全體として、△なんでも體驗する、そいつはやはり結構なことだ▽という立場が私には次第に魅力をおびてきます。」「世のなりゆきと心の中で折り合おうと努めています、工合はわるくありません。事の全體にたいしては、相當に用意ができていましたから。」

二〇年三月一六日、カップのクーデターの最中に、「獨裁者カップはあなたにも人間として好ましくはありませんまい。全體として、只今の権力掌握者たちのある種の傾向には共感するものの(……)、この行動は早まった、事の平靜な進行を妨げるものだ」という印象を受けています。そして國中にふたたび大いに普及した保守思想の信用をひどく危うくするのではないかと恐れています。「考察」で半ば豫言的にみとめていたドイツの民主化が現実となったとき、心で抵抗しながらその現實と折れ合おうとする努力。しかし心の底はやはり保守である。だが歴史の歩みを逆もどりさせようとする反動にも賛成できぬ。

二二年六月末ラーテナウが右翼の手で暗殺されたとき、七月八日の手紙で、「ラーテナウの最後は私にも大きなショックを意味しました。この野蠻人たちの、またはこの理想主義的な狂人たちの頭の中は何という暗さでしょう。……私はドイツの顔の歪みに悩んでいます。」そしてその頃準備していた「ドイツ共和國について」の講演にかんしては、「……そのなかで青年たちの良心に訴えるつもりです。私は『考察』を否認しませんし、社会主義や民主主義のような、彼らが心ではそれを越えてしまっているものに、彼らが感激するよう求めるものでは更々ありません。しかし機械的な反動を私はかってセンチメンタルな粗暴と呼びました。そして新しいフマニテートは民主主義の地面のうえにだって、けっきょくは古いドイツの地面のうえよりもわるくなく育つかも知れないのです。言葉をやがって、暴れだすのですね。」「青年たちは精神的非政治的であるとともに

また理性的政治的になり、所與のものにもう少しこだわらず、肯定的に對すべきです。」

ここでは一八年、二〇年の頃の心中の抵抗が次第に肯定へと變つてきており、さらに数年後にマンをして反ナチの態度をとらせたものの萌芽がはっきりあらわれているが、しかしこのことはあの共和國講演でもうかがえることで目新しいことではなく、またこの共和國擁護の發言の背後にラーテナウの暗殺事件があつたろうことも、その草稿を讀めば容易に想像がつくことである。ただ政体變革やカップ・クーデターへの直接の反應が知れるのははじめてのことで、ラーテナウ事件にたいする反應にしても、それが直接的個人的にあらわれていて、戰中の民主主義攻撃から戰後の民主主義擁護へのマンの「轉向」なるものには(マンの民主主義という用語のその折々の内容がもっと調査されねばならない)、革命やその後の國粹派のひきおこす政治的諸事件が強く影響していることを、資料としてはまだ不十分ながら、幾分なりと照明してくれるのである。その点でもこの書簡集は有益である。

なおカントロウィチ (Alfred Kantorowicz) が編集した書簡集 Heinrich und Thomas Mann. Mit 42 Briefen von Thomas Mann an Heinrich Mann, 1956 は貴重な資料であるが、最近とはいえぬかも知れぬので今は割愛したい。それからエリカ (Erika Mann) の編纂する一八八九—一九三八年のマンの書簡集は今秋刊行の予定だそうだが、本稿には間に合わない。ただ東ベルリンのトーマス・マン文庫の主任であるノ

イマン (Erich Neumann) がこの書簡集について、「私はその校正に參與したが、どんなにすばらしいものがそこにあるかを知っている」と述べていることを付言しておきたい。

二

研究書として次の三つを取り上げた。

A. Erich Heller, Thomas Mann. Der ironische Deutsche. 1959.

B. Inge Diersen, Untersuchungen zu Thomas Mann. 1959.

C. Anna Hellersberg-Wendiner, Mystik der Gottesebene. Eine Interpretation Thomas Manns. 1960.

これらはそれぞれ異った立場からのトーマス・マンへのアプローチであるが、なかでも異色あるのはCである。

マンの文学は以前からキリスト教、ことにカソリック系の評家から攻撃を受けることが多かった。一例をあげれば、「ヨーゼフとその兄弟」における神學の世俗化、神話の人間化、「選ばれた人」における聖者傳説の心理化、そしてそれが鋭く寫實的に、かつイローニッシュに、あるいはフモリストイッシュに遂行されることが正統的信仰の神學者や文學者を刺戟するのであるらしい。そして彼らの攻撃の勢いは、マンが「わが時代」(一九五〇年)で言っているように、「近頃讀んだことだが、ドイ

ツでは或る知的委員会が私のライフワークにはキリスト教的性格が一切みとめられぬと宣告したそうだ」というところまで至ったのである。

ところがこれにたいしてCの著者ヴェンドリーナーは、「マンがあらゆる教義的な信仰から遠いにかかわらず、その詩的な深部透視の特性はこの作家の心的狀態のキリスト教的性格を示している」として、この前提から、この作家をキリスト教の歴史の枠内で理解することをその課題としている。本書はそういう趣旨のものであるから、基督者でもなくまたキリスト教の精神的傳統から縁遠いわれわれには著者の展開する論証をほんとうに理解することはむづかしいと思われるが、私の理解したかぎりで一言にしていこうと、マンの殆んどすべての作品に共通している主要人物の孤独性または疎外の狀況は「質り多い、生命をおくる、生命をたもつ Partizipation (神への参与ということなる)の缺如」がその原因であるとして、その視點からマンのライフワークを考察してゆくというのが著者の一貫した方法であるとみてよいと思う。

そしてそのばあい著者は、マンが意識しているといないとにかくかわらずむしろ意識していないほうを重視して、作中人物の狀況が神からの背離 (Abfall)・神からの遠ざかり (Gotteseferne) の狀況であるという解釈を強いるように作品が形づくられていくところ、この作家の心的狀態のキリスト教的特質が明らかにされているとするのである。そしてこの心的狀態を根底にすえて、次に詩的造形における主要モチーフとして、マン

の「ヨーゼフとその兄弟」にたいする自己注釋を手がかりに、『離脱』と「上昇」と「時間の止揚」、さらにそれを補充する三つのモチーフとして「自己中心主義」と「対立」と「系譜」とをあげ、作品を年代順にとりあげながら、これらのモチーフが繰り返しあらわれてくる有様を指摘してゆく。そのさい著者はマンの「深部透視の特性」をよく表わしているものとして「空間的象徴」ということに特に注目して、綿密な解釋をほどこしてゆく。

例えば「ブッデンブローク家の人々」の開巻第一頁のシーンで、祖父ヨハンの、孫娘トニーの唱えるカテヒズムへの嘆息、トニーの困惑の姿勢、この二人の位置、さらに一座の人々の位置、窓外の晩秋の風景、室内の絨緞の繪模様、うす暗い隣のホテル、とくにトニーがカテヒズムを唱えながら思いだす冬の手籠の落降の感覺など、すべてに薄明の、末期の、不安定の、逸脱のシンボルを讀みとるというやり方である。ところでそのような「宗教的状況のヴィジョン」はマンの全作品に浸透しているが、ただひとつの例外として、「選ばれた人」のなかの、あの無限の水平線をみはるかす岩礁の上で贖罪するグレゴールのイメーシにおいては、(intefense)のヴィジョンは自己をこえて飛躍している。かくてこの贖罪者はその完全な自己犠牲のゆえに全一者との Participation の幸福が授けられるのだ。そしてこの作品における永遠なるローマとその精神的な權威というイデーはこの作家として一見奇妙にみえるかも知れぬが、しかし彼のライフワークを深く理解すれば、彼の發展のカゾリック

的結末はよく分るだけでなく、また自然なことでもある。——これが著者のもっとも言いたかった結論ではないかと思う。

この結論には疑問をいだかざるをえないが、Participation の幸福の喪失がマンの文学の主題であるという解釈は解釈としてはたしかに可能であろう。なぜならマンの文学は他ならぬ現代の資本制社会における市民(ブルジョア)の疎外状況、そのなかでの没落、あるいはそこからの脱出の苦しみを主題とする文学であるのだから。そしてそのような「人間」の悲劇または不幸を、基督者の立場から神への参与の欠如に由来するものと見ることは可能なはずであるから。しかしヴェンドリーナが「人間存在」とか「人間實存の状況」とかいうばあい、その人間は具體的規定を全く欠いているということとは別としても、著者の理論體系のなかに作品のありようがうまく嵌まらぬようにみえる場合をひとつ挙げておきたい。

ヨーゼフの系譜が種族の宗教的傳統からの漸次的離脱のそれであるということはその通りだとしても、アブラハム、ヤコブ、エリーツァ、ラエル、ヨーゼフという系譜を思考人の背教の哲學、近代の懷疑の破壊的な結果の表現とみるのであれば(『報告九七頁』、第四卷「養う人、ヨーゼフ」が四部作のうちで最も明るい、朗かな気分にあるという事實とどうつながるのであろうか。もし作者の心的状態がキリスト教的であるとすれば、この最後の巻のヨーゼフはトーマス・ブッデンブロークやアシエンバハやアドリアンのように、もっと暗い、もっと悲劇的な姿に描かれたはずではなからうか。この疑問をぬぐいえない

いのである。

Cの著者の上述のような見方にたいして、Aの著者ヘラーはマンをイローニシユなドイツ人とみる。ところでマンがすぐれてドイツ的な作家であること（右のほうからその否定論が行なわれているとしても）、また彼の精神態度の基本特徴のひとつがイローニであるということはすでに多くの評家の指摘しているところで別に新解釋でもないが、ヘラーはこの人獨特の鋭敏な嗅覺とややとり澄ました手つきで、マンの作品やエッセイにひそむところの、いわば藝術家マンの核と彼に見えるものを探り出してくる。例えばもつとも多くの頁を割いて、「非政治的人間の考察」を扱っている「保守的ファンタジー」と題した一章のなかで著者はこう書いている。「トーマス・マンが一九一四年に保守主義者であったとすれば、それは疑問の余地ある政治的決定であった。にもかかわらずその決定は疑いもなく彼の藝術家としての性格に根ざしていたのである。」（二四三頁）「トーマス・マンのファンタジーはその自然の素質によってイローニシユな、それどころか悲劇的で貴族的な歴史観に傾いており、人間の幸福と價值を政治によって組織的に高めようとめざすすべてのイデオロギー的事業家精神にたいして極度の懷疑に傾いていることはたしかだ。」（二四〇頁）そしてこの「およそ詩人の心に生来のものとみえる」保守的ファンタジーがマンをして Zivilisationskritik を攻撃せしめ、保守的ドイツ（たとえそれが「ほんものでない政治的幻像」であったとしても）を擁護させたのである。

それではその後のマンの進歩的な政治的発言はどういうことになるか。著者はそれを説明して、それは「考察」で政治的に誤りを犯したという良心のとがめがそうさせるのであり、その罪を償わねばならぬという感情がそうさせるので、彼の後期の政治的進歩性への促しに、殆んど常に「わざとらしい人の好きと、やや不興げな人間好意」がまじるのもそのせいだという。（二九頁、一三三頁）その証拠に、と著者は死の直前のエッセイ「チューホフ論」（二九五頁）を取り上げ、それを次のように読みとる。

マンはここでチューホフの「花嫁」にあらわれる未來社會のヴィジョンを引用して、それは今日のソ同盟における社會主義の建設熱のあるものを先取したのではないかと問い、チューホフが「退屈な話」の老學者のように、「私は何をしたらよいの」というカーチャの問いに答えられず、自分の仕事の意義を疑いながら、にもかかわらず最後まで制作にはげんだことに触れて、にもかかわらず続けられるこの仕事には或る道德的なもの、奉仕的なもの、社會的なものがありはすまいかと問うて、ここでは「革命的オプティミズム」に近づいたようにみえる。しかしあの老學者の「どんな練達の分析家だって私のなかには一般的理念とか生ける人間の神とか呼ばれているものを見つけないでまい。そしてそれが無いとなると、つまりは何も無いわけだ」という言葉を引用するときのマンのこの言葉にたいする共感には、あの疑問符をうった人類愛的發言よりもっと深く讀者の心をうち、説得する。未來の幸福な社會への希望には、常に

保守的ファンタジーの影がさす。残るものは「ぼんやりした希望」と「信仰のようなもの」。信仰と救済は宙にかかったままである。(一八七頁—一九二頁)

このようにヘラーは死期近い老作家の發言に「考察」以來變らぬ保守的ファンタジーを嗅ぎつける。だが後期の政治的發言に、良心のとがめからくるコンプリメントの要素があることをかりに容認するとしても、例えば「ファウスト博士」の芸術的造形のなかで、發狂直前のアドリアンが告げるあの未來のヴィジョンはどういうことになるのか。その輪郭は漠としたものであるとはいえ、「美しい作品に豊かな土壌を供し、美しい作品が正直に順應できるような體制」という未來社會のヴィジョンは、資本制末期社會の藝術家の孤獨、その困難に苦しんだ者の、苦境の底から突きあげてくる切実な願望の像ではなかったのか。

マンの「チェーホフ論」は次のような一文で結ばれている。「私は何をしたらよいの」というカチャーの問いにたいしては、「ほんとうに、私には分らないんだよ」としか答えられぬ。

「にもかかわらず制作し、お話を語り、眞實を形につくり、それで乏しい世を楽しませる、眞實と朗らかな形とがたぶん人々の心を解き放つようにはたらきかけ、もっと良い、もっと美しく、精神の正當な要求にもっと適合した生活に向って、世界に用意をさせることができようと、ぼんやり期待して、殆んど確信して。」(傍点筆者) この藝術の社會的奉仕的役割を語る非常に留保のついた言葉から、ヘラーはその留保のほうに力點をお

き、ディルレーゼンはその期待と確信のほうを強調する。が、この両者が共存していること、期待と確信は留保によってかけり、留保されても希望をもち、信じたい念の存在すること、それがこの作家のほんとうの心の姿ではないのだろうか。

このイローニシュなドイツ人は、はたして神を信じていたのか、未來により良い社會のくることをほんとうに信じていたのか、詩人の夢が人生を現實に變えうると信じていたのか。トーマス・マンにたいしては、そういう「最も重大な問題」についての一義的な斷定はなしがたいのである。マンの文學はブルジョア社會への、ブルジョア的人間への批判のリアリズムであるが(マンみずからは認識の試みにすぎぬというだろう)、作者はブルジョア的世界を端まで歩いてきて、社會主義的世界の入口の前まで來た。闕にむかつて片足は地面から離れているが、もう一方の足はやはりこちら側を踏んでいる。その宙にかかった姿勢がこの作家の懷疑を、イローニを、そして保守的ファンタジーと未來への希望というその二面相を規定している。

ところでCの著者ディルレーゼンはマンの文學の批判的リアリズムとその限界、彼のブルジョア・ヒューマニズムとその限界というところに考察の焦點を合わせる。そして例えば「ワイマルのロッテ」に描かれたゲーテ像の不十分さ、また「ファウスト博士」における殆んど絶望的なペシミズムを指摘して、それを作者の階級的位置に、最後までブルジョア階級とそのイデオロギーから離れえなかったという事實に帰せしめる。そのばあい著者は作品から抽象される觀念的内容のみを問題にするので

はなく、それと藝術的造形との關係、前者が後者を通じて、そのなかで表現されるその過程に注目する。

「ヴェニスの死」の分析をとりあげてみると、著者はまず主人公アシエンバハの破滅は帝國主義時代のドイツの支配階級と結びついている藝術家と市民が辿らねばならぬブルジョア的世界の破滅であり、それは野蠻への道、ファシズムの一面面を反映している道であると前置きしたのち、この小説の主要モチーフとして、後退するモチーフとしての姿勢保持 (Haltung) のモチーフと、推進するモチーフとしての誘惑のモチーフを指摘し、話の展開、それぞれの局面をこの兩者の關係において丹念に追つてゆく。誘惑のモチーフはそれぞれの局面に応じてその表われ方を変えるが、發展の各點において姿勢保持のモチーフより優勢であるのがその特長だ。そして著者はとくに主人公がその悲劇のおける土地ヴェニスに定着するまでの偶然の連鎖に注意し (見知らぬ旅人、船上の會計係、化粧した老人、ゴンドラの舟頭との出會い。旅行鞆の誤送など)、それら偶然の出來事がもつ象徴的性格を次のように考察する。

これらの誘惑者のタイプや偶然の出來事はすべて重い意味を荷い、主人公の心に微妙に影響するが、しかしそれ自身としては日常的合理的に説明できるもので、反理性的なもの、非現實的なものは何も起つていない。因果性は、例えばカプカのばあいのようにシンボルのために、主人公にたいする機能のために廃棄されてはいない。そして自身の因果性にしがっている外界は主人公の心からのみ、そのパースペクティヴからのみ何か

を意味し、象徴的となる。このことは主人公の破滅は何か現實外のデモニシユな力が原因なのではなく、彼自身の心からくるのであり、彼自身の心が現實のリアルな出來事の結晶點だということの意味する。マンと例えばカプカにおけるこういうシンボルの使い方に、リアリズムと非リアリズムの創作法の重要な相違がある。しかし他面そこにこのリアリズムの限界がある。主要なプロセスが最後の破局へ熟してゆくのは主人公と周囲の世界との相互關係のなかではなく、主人公自身の内部であるから、外界は彼にとって偶然の出會いの役目しかもたず、そこでこの象徴的な偶然が周圍世界の諸關係の造形にとつて代らざるをえない。しかもそれは社會的なものを主人公の内部へ回送した結果そうなのだ。(二〇〇頁—二〇一頁)

著者の分析で殊におもしろいのは、この小説の語り手にたいする考察である。冒頭に近い主人公の旅ごころ、また美少年を見たときの美的陶醉、それらの心的状態を描くとき、語り手は描かれるその対象の、相對的にまだ無害であるという實際のありようにふさわしくない、強い、どぎつい、主人公の破局を豫期しているような言葉を用いる。この用語法と対象との不一致は作者がよく考えてやっていることで、語り手の客観性、主人公からの獨立性がそれによって印象づけられる。しかし重要なプロセスは主人公の内部で演ぜられるのだから、彼の心のうごき、その出現の過程を残らず描いてゆくというのが語り手に負わされている機能である。だから彼は主人公に密着して、その語る調子、そのスタイルさえ最初はアシエンバハの作品のそ

タイルのように殆んどわざとらしいほど莊重であるが、主人公が解體してゆくにつれ弛んでゆき、言葉は次第に抒情的に、文の流れは柔らかく、劇的になってゆく。だが語り手はそれと同時に、彼みずからパースペクティヴをもち、言葉の上では主人公に密着しているとみえながら、主人公が變化するにつれ、その語る態度は次第に主人公から離れてゆく。語り手は讀者に向つて最初は警告者のようにふるまい、それが徐々に嘆く人、批判する人に變つてゆく。そして小説の進行のうちに次第にはつきり見えてくる語り手の相貌は、理解しようとするながら理解できぬ人間、目の前に突然あらわれた深淵にのぞんで途方にくれて立っている人間を思わせる。彼の立つボジションを名づけるなら、やや古風で平凡なヒューマニズムのそれだ。彼はまさしく「ファウスト博士」の記録係・語り手であるツァイトブルムの兄弟であり、この兩者のあいだに「マリオと魔術師」の私という語り手が位置する。

ここで注目すべきはマンがこういう型の語り手をファシズムとの対決のさいに選んでいることだ。上述の三つの場合とも語り手はファシズムにたいするコントラスト・タイプであるが、そのことによってファシズム的なものがヒューマニズム的市民性の歴史的な頹落の形態であること、およびブルジョア・ヒューマニズムのファシズムにたいする抵抗の無能力という二つのことが捕捉される。そして主人公にたいする語り手の關係と主人公の解體を通じて、この小説は資本制末期の野蠻の擡頭にたいして歴史的なパースペクティヴをえる。アシェンバハをと

らえて破滅させる精神現象としてのファシズムが傳統的なブルジョア・ヒューマニズムと對決させられ、同時にあの精神現象はブルジョアの安定が内部から空洞化していることの必然的な産物であることが明らかにされる。トーマス・マンは「ヴェニスの死」で、ブルジョア的世界の秩序が脆いものになったことを造形しただけでなく、ブルジョア的世界のその不秩序から生まれてくる不気味な危険をも造形したのである。(二六頁—二三頁)

作者が意識しないでやつてのけるリアリズムにたいするこの分析はたいへん鋭利で、そして適確だ。その同じ著者が「チューホフ論」について、マンの態度が非常に遠慮がちなことをみとめながらも、「きわめてリアルなオブティミズム」が感ぜられると言っているのはどうしたことだろう。(三〇七頁)ディールゼンはアメリカからスイスへ移住後のマンの晩年の再飛躍という論旨のもとに、「チューホフ論」を同時期の「詐欺師クルルの告白」との關係において考えているので、この論文をそんな風に讀んだのかも知れないが、論者が自分の理論構成に適な要素は無視し、或いは無いものを持ちこみたくなるというあの誘惑にここで陥っているのではないのか。ここでは、逆の方向にかたよつてはいるが、ヘラーのやや意地のわるい讀みとり方の方がまだ事の真相に近づいていると思えるのである。

一九五六年マンの遺族が彼の遺稿および彼の書齋の調度と蔵書をチューリヒ工科大學に寄託した結果、大学図書館の付属施設としてトーマス・マン文庫が設立されたのであるが、この文書保管所は活版になってゐるマンの著作（翻譯もふくめて）はむろんのこと、自筆原稿、草案、手記、メモ帳、日記、書簡などを豊富に蔵してゐて、マン研究のための宝庫の趣きをそなえている。しかし日が浅いため、それらの資料の整理の段階にあつて、一般の利用のために出版公開されるところにまで至つていない。今秋第一巻が刊行されるはずの二巻本書簡集はそのほんの一部にすぎないが、それらの資料を利用するのに好適の地位にある文庫主任シェラー（Paul Scherer）は、私の知るかぎりでは今までに次の三つの報告を發表してゐる。どれも未刊行の草稿、草案、メモ帳、書簡についての史料研究である。

- A. Bruchstücke der Buddenbrooks-Urhandschrift und Zeugnisse zu ihrer Entstehung 1897—1901. In: Die Neue Rundschau, 1968, Heft 2.
- B. Aus Thomas Manns Vorarbeiten zu den Buddenbrooks. Blätter der Thomas Mann-Gesellschaft Zurich, Nr. 2, 1959.
- C. Thomas Mann und die Wirklichkeit. In: Lubekische Blätter, 1960, Nr. 7.

Aは「ブッデングローク家の人々」の成立が一八九七—一九〇一年であることを證明したもので、利用された資料は自筆の

最近のトーマス・マン研究から

手稿断片、メモ帳、およびザムエル・フィシャーのマン宛の手紙などで、いずれも未発表のものである。先ず作者が制作のために使い、作中人物の特徴や運命、所々のシチュエーションや場面などの構想を書きとめた二つの手記が紹介される。第一は一八九七年の日付の記入のあるもの（この年の五月にフィシャーが長篇小説を書かないかとすすめてゐる）、第二は一九八一年二月—一九九一年一月の時期が確定できるもの。次に一九九七年一〇月末にローマで執筆がはじまり、さらに一九八二年二月一〇日直後に書きつづけられた自筆原稿の断片が紹介される。その内容は活字本のテキストと比較すると、その冒頭から第三部までのうちの或る三つの部分に相當するが、テキストと合致するところとしないところとある。そこで著者はテキストとの比較検討の結果、この手稿断片は作者が印刷のための自筆原稿（これは失なわれた）のうちから除外して、作者みずからこの小説の成立史の資料として他の同種の資料に添えて保存しておいたものであると斷定してゐる。なぜ、そしていつ除外したかという点については、未発表のフィシャーおよび原稿審査係のマン宛の手紙を證據にして、原稿が一度作者に送りがえされてゐる事實から（一九〇一年四月）、そのさいに作者が出版社の勧告に應じてこの手稿断片にあたる部分を書き直したり短縮したりしたために、この不要になった部分の第一稿が残つたのであろうと推定してゐる。このようなシェラーの作業は、砂によれば、この初期の大作の成立については從來眞偽さまざまなことが言われてきたが、いま漸く始まつたばかりの史料研究や今後の科摩

的な出版のための確かな基礎として、現存の資料で可能なかぎりこの作の成立史を解明し、年代的にはつきりさせておきたいというのがその目的なのである。

次にBはその前半で、Aにおいて確立された成立時期を更にこまかく規定している。利用された資料は一八九七年初夏から九八年二月までのあいだに大型紙に書きこまれた数種類の草案で、とくに時期的に最も早い第一の草案におけるブッデンブローク家の系圖、トニーの再度の結婚というモチーフ、第二の草案におけるトニーの特徴や運命のすでに相當に熟している構想、とりわけこの小説の諸人物や事件にかんする詳細な年代リストが紹介される。その他個々の點について報告したのち、著者はマンが作中のいろいろな出來事が自然に無理なく展開するようになるまで、どれほど粘りつよく職人的な作業をつづけていったかを一步步たどることができると言う。そして最後に確定された成立の年代順は、着手が一八九七年六月、同年一〇月の末までが準備作業、一〇月末から翌年二月中旬までが第三部までのテキストの仕上げ、それから一九〇一年七月または八月の印刷の終了までが以後の部分の完成に費されたということになる。

後半はトニーについての構想の進展にかんする報告で、数種のメモ帳、ことにマンの妹ユリアが兄の求めに応じて、トニーのモデルとなった叔母のエリーザベトについて書き送った報告が利用される。そのばあい、とりわけ粉本というべきユリアの報告と活字本のテキストとを比較しつつ、作者がいかにこの

粉本に忠實であつたか、そのことから起る拙削力の欠乏という非難にたいしてマンが他の機会にどのように反撥しているか、また粉本からテキストが離れている點に、作者の獨自性がどのようににはたらいているかを個々の例について綿密にたどっている。そして著者は「モデルの事實と詩的に強化された體驗とが底知れぬほど異なるものであるということを理解したい者は、この比較によってそれができよう」と述べている。

Cの主題もBに關連していて、ここでの問題は、マンが自然主義を通じてきた作家として文學の基底としての現実性というものをごどれほど尊重しているか、しかしまた自然主義のように現實性の奴隸にならないで、それをどのようにに芸術化しているかという問題である。資料として利用されたのは、ブッデンブローク家の財産とその変遷の一覽表、リューベックの經濟關係を叔父に質問した手紙とその返書、「フィオレンツァ」のフィオレの肖像、少年クルルによる父の署名偽筆のことを叙べるために作者みずから試みているその署名の草案、「トニオ・クレーガー」の一場面となる海辺ホテルの繪業書と勘定書、この小説の第一稿から残つた數枚の手稿などだ。この殘簡をみると、それはトニオが故郷の町へ向う汽車の中でお客を觀察したり、汽車が町に近づくにつれ少年期との再会のさまざまな感慨をもよおすといふかなり長い描寫であるのに、あとでそこは數行の報告的短文ですませ、お客は海邊ホテルの租客に、彼がトニオをじろろ見る所作はホテルの門衛の所作に、あの感慨は故郷の町の驛からホテルへ歩いてゆくその折に湧いてくるという風

に書きかえられている。そのようにより適當な脈絡のなかへ移すことによつて、主人公の體驗の内容が深められ、生命を吹きこまれていると著者は言う。その他多くの資料について報告したうえ著者の結論は、マンにあつては現實の客觀的な像と主觀的な像とが合流している。彼は自然主義から出發した人として「觀察する人」であつたが、しかしまた早くから、そして次第に「考察する人」ともなつた、そういうことである。

シュラーはマンの傳記や作品の成立については不明な点が多くなかなか多い、今は歴史的な研究が必要だと力説していた。そのためには現在利用しうるかぎりの資料を十分に生かした *historisch-kritisch* な全集の刊行が望まれる。この仕事をいま東ベルリンのドイツ科學アカデミーに所屬するトーマス・マン文庫が進めている。

マンの著作のドイツ語版にテキストの誤りが多いことはマン自身が慨嘆しているところである。主任のノイマン宛の手紙でマンが擧げている例について試みに檢索してみると、例えば *Fischer Bucherei* の一冊である「*ウエニスの死*」のなかに收載されている「*Das Gesetz*」の最後のところ (二四一頁) *ein Teil der Nothdurft* と *das Gesetz* が *ein Teil der Nothdurft* と誤っている。そういう誤まりは残りなくただして、正確なテキストを確立してもらいたいものだ。それから當該作品の成立史を示唆する草案、メモ、原稿の異文その他を上手に按排してほしい、書簡や日記類も蒐集しえたかぎりのものをおさめてもらいたい。トーマス・マン文庫はその主要任務である「トーマ

ス・マンの著作の科學的な全集の準備」をだいたい次のように進めている (ベルリンのドイツ科學アカデミーの *Mitteilungsblatt*, 1960, Heft 2 による)。

計畫全體の主宰者として東西ドイツおよび外国の専門學者から成る評議員会が設けられ、そのなかから數人の *Herausgeber* が選ばれた。さらに仕事の実際の推進機関として、それら編纂者と評議員会の事務主任と文庫の所員から成る委員会が常設される。他方で文庫は全集刊行にかんする資料の獲得と蒐集、テキスト批評と修正、マンの著作における引用文の出典の調査、マン研究文献の索引カードの作成等々の仕事によつて全集の編纂をたすける。

ところで編纂の基本方針であるが、全集は數部に分たれ、各部を編纂者が分担する。最初の刊行豫定は「長篇小説の部」で、これをマーゴン (*Leopold Margon, Berlin*) シェライネルト (*Kurt Schreinert, Göttingen*) が擔當する。「短篇小説の部」はメルティニ (*Fritz Martini, Stuttgart*) ヨラー (*Jochim Müller, Jena*) およびノイマンが擔當する。その他の部の内容と編纂者は不明。その他に各巻にはそれぞれの *Bereiber* が豫定される。次にテキストは、著者が正書法の誤りの訂正ということ以上に手を加えた最後の版に據る。アパラートについては、マンの創作方法のようなばあいにはテキストの成立と發展を科學的に精密に再現することが殊に大切で、テキストにおける複雑な異文が發展のどの層にぞくするかをできるだけ正確にきめて、眞實に近い讀み方を利用者に提供すること、しかし同

時に、別の読み方も可能であるような個所を記して、不正確な點がそれらの層の相互關係においてどの範圍にまで及ぶかをはっきり指摘すること、そういうこみ入った操作が必要であるために、アバラート作成のための一定の指針が決定された。以上は一九六〇年三月の常設委員会で確認された事項であるが、その後この方針に變更はないようである。

ノイマンによればこの全集刊行はまだ準備段階にあり、現在

は「選ばれた人」が第一回の試みとして刊行が豫定されている由。しかしその時期は未定らしい。なおベルリンの文庫は原資料を最も豊富に藏しているチューリヒの文庫から、そのフोटコピーを提供してもらって仕事をすすめているようだ。そして兩者とも未発見の資料の獲得と蒐集に努めており、その成果も着々あがっているとのことである。(一九六一・二一・二六)